
夢の楽園 S S

壬宇羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の楽園SS

【著者名】

壬宇羅

【ノード】

N5779M

【あらすじ】

日々の退屈が嫌で、日常から飛び出した少年。

荻野抗治「オギノ」「ウジ」と

謎の家出少女。

林童恵奈「リンドウ」「ナ」の出会いから始まった。

なぜ、ショートストーリーなのかは、今は秘密と言ひ事で。

萩野「ウジ編」序章1（前書き）

読みやすさを考慮して、編集しました。

週一くらいで更新できればなと思います。

萩野「ウジ」編 序章1

春夏秋冬、365日、毎日毎日変わらない日常。

そんな毎日に虫酸がはしる。

高校最後の年。

それがなんだって言うんだ？

確かに、今年で高校生活は最後かもしけない。

しかし、卒業すればまた、進学するにせよ、就職するにせよ、その先に待つのは、何も変わりばえの無い平凡な日々だ。

それが一番なんだよ、と大人は言つ。

俺にはそれが理解できなかつた。

いや、理解しようとも思わない。そんのは、妥協が産んだ産物であると俺は言い捨てる自信があつた。

毎日毎日、面白みの無い日常を過すだけなんて、そんな人生はほじめんだった。

?

気付くと学校には、もう何週間も行つていない。?

別に学校がいやとかじゃない。ただ、刺激の無い今の生活にうんざりだった。

昼下がり、俺はいく宛も無く、やる事も無く、ぶらぶらと街を彷徨つていた。

家にももひ、数日は帰っていない。

街路樹の脇に置かれていたベンチに座り、ぼうっと、遠くを眺めていた。

突然目の前を誰かが横切る。

セーラー服を着ていてるその少女は、下を向きてボトボと歩いていた。

時計を見ると、時間はまだ、二時に差し掛かったあたりで、下校の時間と言う訳では無い。

特にそれ以上は気にする事も無く、俺はベンチに横になる。

ん？

落し物か。

どうやらそれは手帳のようだ……学生手帳か……。

「はあ～」

溜息を吐き手帳を拾いに行く。

「サイフとかなら最高だったのにな……

ペラペラと拾った手帳をめくつて見る。

林童恵奈、地元の中学校の二年生だそうだ。

「「」なんもん持つても仕方無いよな……」

投げ捨てる素振りだけして、そのままポケットの中に入れる。

「まあ、何かの縁だらうしな。しょうがないよな」

ベンチから立ち上ると、先程の林童恵奈のあとを追う。

こんな時間に歩いている中学生なんて、すぐ見つける事が出来る。
案の定、歩いて行つた方へ少し駆けて行くと、すぐに見つける事が出来た。

「おーい、そこのキーリングー」

しかし、彼女の反応は無く、歩む足を止める気配は無い。

?はあ~。

溜息を吐き出し、頭を搔くと彼女の前に立って立ち塞がつてみる。
しかし、それも無視して先へと進む。

?「おい、ちょっとまで」

勢いで彼女の腕を引っ張る。

しかし、彼女は、それすらも無視して先へと進もうとする。

「だから、俺の話を聞けって

そこで、ようやく彼女は反応を見せた。

「なに？」そんな風に引っ張られたら、先に進めないんだけど

「いや、だから、話しひを聞けつて、お前、林童だろ？」

「だったら何？ 追っかけ？ ストーカー？ 異常性癖者？」

初対面の奴にそこまで言われる筋合ひは無いこと、その場で、とひとつ帰つても良かつたが、それだと、ここまで来た意味がなくなる。

俺は、ポケットから、彼女の生徒手帳を取り出し、差し出します。

「ほり、落し物、一応大事なもんだろ？」

それを確認すると、彼女は、差し出した手帳を、奪つよう取る。

「……、…見た？」

へ？

「中見たかって聞いてんのッ？」

まあ、見たつて言えばみたが、てか、なんで、そんなに険しい表情なんだ。緊急事態発生。

回答しじだいじやバツドンドまつじぐうだな。

俺は、回答を考える。

見ました、と丁重に謝る。

手帳を放置して逃げる。

ななめ四十五度から手刀をかまし、記憶を消す。

いやいや、最後のは無しだな。
真ん中のもただのチキンだな。
となりや、やっぱし、謝るしかないか。

「あ、あー……、見ちまつたんだ、悪い」

手を上げて、頭を下げる。

彼女は、一瞬鋭い眼光を向けたが、すぐに溜息を吐き、軽く手を振った。

「……、一応礼は言つておくよ」
「うんで、なんにも、思わないんだ？」
「なにがだよ？」

「こんな時間に、中学生が歩いてる事にだよお」

林童は、口に人差し指を当てながら、上目遣いに俺を見る。

「あー、俺そういう趣味無いから」
「そうじゃなくてッ！ なんで中学生が、こんな時間にぶらりぶらしてるのでーとかッ」
「あー、俺も似たような人間だしで、他人の事を、とやかく言つ権利なんてないだろ？」

言つと、林童はむすつと顔を曇らせた。

その後は、適当な話をしていた。

こんな、特に意味のない会話は、久しぶりだ。

人と会話をする機会なんてなかつたからな。

実際のところ、林童に、興味が湧いて来た。

多分、彼女も訳有りなんだらう、俺に俺なりの理由があるよつて、

こいつにも、何かしらの理由があるあるんだよな。

そう思つと、無性にこいつの事が気になつてしまつ。

あくまで、年配者としての心配だが。

そんな事を、心中でつぶやいてると、俺は、無意識のつづり、
林童の頭を、撫でていた。

しかし、林童は、何も言わない。歩みの足を休める氣はないらしい。

周りからは、若いカッフルにでも見られているんだろうか。

「てか、この手は何?」

「いや、特にこれと言つて意味はないんだが、なんとなくかな……」

林童は、ふーんと呟つと、また、前を向く。

どうやら、まんざりでもない様子だ。

「やばい」

突然、林童が声を上げた。

目線の先には、警官が一人たつていた。

マジかよ。見つかったら、補導だよな。

俺は、まだ逃げ道はいくらでもある。義務教育を終えている、十七歳は、昼間に歩いていたとしても、二十歳以下にふさわしく無いものを、携帯所持していない限りは、大抵は職質だけで済むだろう。

ただ、俺の隣りのこいつは違う。

一応、義務教育である、中学生なんだ。

見つかれば、親への連絡は免れないだろう。

まあ、もっとも、見つかればの話しであり、見つからなければどうと言つ事はないのだが。

……。

なんて、思った矢先に、林童は、一旦に駆け出しあがつた。

そんなもん、見つけてください」と言つてくるようなもんだ。

当然、自分の姿を見るや駆け出す、少女を警官が見逃すハズもなく。一瞬の間に、少女を追つ警官の図が出来上がった。

俺の横を、すみません、通りまーす。

とか言って、駆け抜けて行く、警官を俺はただ、見送ることしかできなかつた。

林童は、警官に追われ、走り去つた。

「はあー、大丈夫か、あいつ？」

心配だが、俺が行つても、なんの役にもたたないだろう。

だから、俺は、ただ、ここで、あいつを待つことしかできなかつた。

返つて来る保障なんてないの。

萩野「ウジ編 序章1（後書き）

力及ばずの汚い文字配列や、変な言い回しが、多いかもですが、今後、読んでくれたら幸いです。

序章2（前書き）

文字量少ないかもです。
先に謝ります。

しばらく、林童が戻つて来るかも、などと言ひ期待をして待つていたが、結局、あいつは、戻つては来なかつた。

「まあ、しようがないわな」

わざわざ、時計を見たら、既に四時を回つていた。

もう、太陽は地平線の少し上の辺りで、月とのバトンタッチが、秒読み段階である事を告げている。

鱗雲が、夕日に照らされ、時折、北風が吹き付け、先程に比べ、えらく寒くなつたような気がする。

この時期は、日が落ちると、一気に寒くなる。早いつもりで、寝床を確定させた方がよさそうだな。

なんて、思いながら、街路樹のある歩道をせつせと歩き始める。

「よう、萩野、こんな所で合ひなんて思わなかつたよ
「誰だ？」

目の前には、陽気そうな人間がたつていて。

正直、こいつは俺の一番の友人だ。俺が、今の生活をしているのも、半ばこいつの影響もある。

俺の目の前で、こっやかな笑みを作るこいつは、俺が、通っていた高校の同級生だった。

いつも、一人で行動していたのに、こいつは、家庭の事情で、学校を辞めてしまった。多分、その時だろう、俺の高校生活が、かつたるものになつたのは……。

「またまたあ、僕だよ、浅川だよ」

「いや、知ってるよ」

「分かつてんなら、いちいち聞くくなよ、人がせつかく偶然の再開をするのが楽しかったんだ。

うがーと、騒ぐ浅川を見て思い出す。

そうだった、こんな他愛のない会話。こいつの、この言ひ返しを見

よむここんでるつて時にツ？」

「聞いてるのかよッ？」

「ああ。ところで、今は何やつてんだ？」

こいつが、学校を辞めたのは春先だった。突然の事だった。

本当に、突然の事だつたんだ。

前日まで、いつもと何にも変わらなかつた。

本当に、いつも通りだつた。

呑気な話しをして、また明日と言つて別れた。
しかし、次の日、浅川は学校に来なかつた。

「一応、仕事しながらボチボチつてかな、今は、アパート借りて、

なんとかやつてるよ。お前の方じゃ、学校ぶりよ、しっかりやつてるか？」

「あ…、あー、まあまあ…かな」

適当に誤魔化しておく、取り合えず、今は、近況を話している間ではない。

寝床を確保しなければならないんだ。

「まあまあって、…まあ、良いけど、それより、この後、なんか予定ある？ 暇だつたら、ちょっと、遊んでこいつぞ」

「全然暇だ」

「オッケー、じゃあ決まりな、どこ行く？ ゲーセン？ カラオケ？ それとも、飯いくか？」

「…そんな金は無い」

「冗談だつて、家この辺なんだよ、寄つてかないか」

「もち却下、怖すぎんぜ」

「ちげーよ、こんなとこひじきも出来ないだろ？」

まあ、それもそうだな。

日は落ちて、辺りは紫に染まつてこる。

冷たい風も吹き付け、どこでも良いくから風のこない場所に行きたい気分になる。

「わかつた、うんじや行くか」

「それじゃ、ついて来てよ」

浅川は、陽気に歩き出す。

先程、林童が走り去った場所を越えると、ボロボロの安アパートが見える。

「これなのか？」

「すごいボロッショ、でもまあ、住んでみれば、風呂もあるし、困ることはない」となんどないんだよね～」

かかかつと笑いながら、浅川は、ボロアパートの階段を登つて行く。俺は、その後に続く。

「おわッ？」

突然、浅川が飛ぶ。

どうやら、何かがタックルを決めたらしい。

そのまま、地上3メートルの位置から、落ちて行った。

「成仏しろよ」

合掌を作り、黙祷しておく。

しかし、数秒も経たないうちに、けたたましい足音を撒き散らしながら、浅川は、飛び立った位置へと舞い戻った。

「何だつてんだよッ？ 少し間違つたら、死んでもおかしくなかつたよ？」

俺に対しても、先程華麗なタックルを決めた者へ対する言葉だ。

俺は、その言葉の先に視線をおくる。
そこには、見覚えのある姿があった。

「林童」

畠間の少女がそこには立っていた。

序章2（後書き）

感想とか、よかつたら御願いします。
それを見ると、やる気になります。

林童は、息を荒げ、目を腫らしてそこに立っていた。

その様子を見るだけで、あの後の事が容易に想像できる。

浅川は、林童に激しく文句を垂れているが、林童本人はそれどころではない様子だった。

「後は俺に任せろ、お前は先に家にいろ」

「さすが荻野、ガツーんと言つてやつてくれよな」

「おつ」

と氣前良くな返事をしてやると、機嫌をよくしたようで、鼻歌混じりに部屋へと入つて行つた。

「何があつたのか…、まあ、言わなくとも大体わかるが」

林童の氣の落ちようは尋常ではない様子で、放つて置いたら、ここから飛び降りてもおかしくない程に追い詰められている。

暫くの沈黙を置いて、俺は、手招きをする。

「ちょっと寄つてかないか、安心しろ、俺の親友だ、大抵の事は気にしない質だから、大丈夫だ」

林童は、こくつと一回頷くと、俺の後について来た。

取り合えず、一応許可はある訳だから、勝手に上がらせてもいい。入ると、テレビと、コタツが置いてある。

取り合えず、テレビをつけ、コタツに入る事にする。

「ほり、お前もそつち座れよ」

そつ言つと、突つ立つたまま、ぼうと、部屋を見渡していた林童は、静かに座つた。

ガラリと、ふすまが開かれ、浅川が登場した。

「暇つぶしに、ゲームやうづせつて、なんでこいつまでこいるんだよッ？」

先程、自分を地上3メートルからダイブさせた張本人がコタツに入つてくつろいでいるのを見るや、浅川は林童を指差して叫ぶ。

「いや、別にいいんじやないか？」

「よくねえよ、大体こいつ、さつき僕を突き落とした張本人なんですかどッ？」

それは聞き捨てられないと言つ表情で、林童は膨れつ面を見せる。

「あれは、事故ですよ、突き落としたなんて、人聴きの悪いこと言わないで欲しいです」

「そうだな。浅川、言い過ぎじやないか？」

「なんで、そいつの肩ばつか持つんだよ、落ちたのは僕だぞッ！」

そして、ここには僕の家だ

頭に血が上つた浅川がうがーと騒いでいるが、俺はそれを丘田に捉えつつ、林童の様子を伺つ。

さっきに比べれば大分落ち着いたようだが、それでもまだ表情に曇りが見える。

しかし、それでも平然を装っている。

「まあまあ、落ち着けって、こいつも反省してるんだから、いいじゃないか……な？」

俺は、そう言って林童の方を向く、彼女は何かを考えているようで、俯いていたが、浅川は、それを見て、猛省していると勝手に捉えて自分で勝手に納得した。

さて、こつからが本題だ。

お泊り交渉をしないといけない。

「ところで浅川、今日泊まつてもいいか？」

直球勝負ッ？

林童を指差して言う。

「お前はどうしたいんだ？」

林童に聞いて見たが、林童は、未だに俯いたままだ。

「いや、反省してくれるのは良いけど、そこまで思い詰めなくとも、確かに死ぬ思いだったけど、俺無事だし」

ずっと俯いたままの林童を心配してか、浅川は、なんとか、話しか

けているが、その努力は虚しくも、彼女の耳には全く入っていないようには見えない。

「お前が良いなら、ここいつも泊めてやつたらどうだ？ 訳有りっぽいし」

「いや、訳有りの人を泊めるのが一番厄介だと思つんですけどね」

「そりゃそつだが、一晩ぐらいいなりにこんじやないか？」

はあーっと溜息を吐くと、浅川は、風呂を入れてくると黙つて、浴室へ向かつて行つた。

林童は、それを見送ると、こちらへ振り返り、少し安心したような表情で口を開いた。

「その、ありがとう……、詳しく述べ話せないけど、今は家に帰りたくないんだよ」

そんな事は、見ればわかるわ。

「言つたろ。俺も訳有りだ、大体わかるさ」

それを聞くと、そう、と咳いて、また顔を伏せた。

と、ほぼ同時に、浴室から軽快な水音が聞こえ、それとほぼ同時に、浅川が戻ってきた。

「おまたー」

「おう、うんじや飯よろしく」

「わかった、ちょっと待つてろ……つて、久しぶりに合つた友人の家に上がり込んでるには、随分な態度ですね」

「まあ、こんなもんだろ?」

「何がこんなもんなのさッ？ まあ、良いけども……、知つてるとほ

思つけど、僕は料理出来ないよ?」

自炊しろよ。

と、つい突っ込みを入れたくなる。

しかし、困った、今日の晩飯のアテが無くなつた。

ちらつと、林童を見る、弱冠の中学生家出少女。夢い期待は潰えた。

「出前でも頼んでくれ」

「本当、図々しいっすね、あんたツ！」

「俺ピザで良いや」

「…、じゃあ、私は握りすしで」

「あー、もう、そんな金ねえよ」

だろうな、てか自炊しやがれってんだ。

「じゃあ、飯どうすんだよ、てか、食材とか置いてないのか?」

「一応、米が、そこに、簡単な食材なら冷蔵庫に入ってる」

「問題は、作り手だけか」

「だな」

ギロリと、林童を見る。

視線に気付いた林童は、包丁で何かを切るようなマネをして、なんか、アピールしているが、そこはあえてスルーしておぐ。

お決まりの、奇跡的な不味さの料理いーとか出できたら、折角九死に一生ものの奇跡的な生還を果たした浅川や、並の人間な俺は、確実に三途の川の向こう側へ押しやられてしまう事だろう。

さて、どうしたものか。

まあ、この際どうでも良い、腹が膨れればそれで良い。

林童は、勝手に台所へ歩いて行つたし、浅川は、食糧調達に「コンビニへ走つた。

俺は、その場で横になり、何気なくテレビを眺める事にした。

？？？

台所から、調理をする音と、つまそりな匂いが漂ってくる。浅川は、コンビニへ行くと出て行ってから、もう、数十分は経っているが、未だに帰らない。

そういうしてこる間に、林童が料理を運んで来た。

「できましたよ、食材が全然なかつたんで、チャーハンとみそ汁だけですけど」

全然オーケーだ、今なら豚さんのご飯でも涙を流しながらつまいまいと、絶賛して食べれるだろうぜ。

ちらと、林童が持つて来たチャーハンとみそ汁を眺めて見る。

「普通につまそりだな」

「だから、料理出来ますよアピールしてたじやないですかあ」

まあ、確かにアピールはしていたが、家出少女がなあ、って思つだろ普通。

「あたし、ちっちゃい頃に、母親亡くしちゃって、ずっと家でのご飯はあたしが作つてたんだ、レパートリーも結構あるんだよ」

もちつと早く言つてくれれば。

浅川がコンビニに走る事も無かつたろう。

「まあ、取り合はず食べてくださいな、きっと涙流して悶絶しますよ」

「いや、悶絶つて…、心配になつて來た、本当に大丈夫なんだろ？
な」

「例えですよ、例え、美味し過ぎて悶絶したよつて歡喜する仕草を連想してくださいよ」

まあ、匂い的にも食えない者でない事は何となくわかるが。
まあ、いいか。

意を決して、チャーハンを口の中に放り込む。

なんだ、この味は、絶妙な塩加減、存在を誇示しきれないベーコンに、全体のバランスを整えてくれるタマネギ。そして、ふんわりと全体を包み込み後味をやんわりと、それでいてしつかりと残してくれる。

「最高だッ？ こんなにつまいチャーハンを食つた事がない、お前、実は三ツ星コックかなんかだろ」

「でしょー、とつてもおいしくいいでしょ、もつと褒めて、褒めてッ！
もつとッ？」

確かに、言つだけの事はある、そんじょそこらの中華店のチャーハンが食べなくなるくらいつまご。

浅川よ、お前の苦労は全くを持つてしての無駄だつたつて事だな。

もう一口。

うめえー、うま過ぎんじゃ、最高だッ？

と、林童的に言つ、つまたの悶絶をしている時に、うまこ具合に浅

川が帰宅する。

「カップ麺でよかつたる？ 参ったよ、近くのコンビニが閉店して、ちょっと歩いたところのコンビニに行ったら、食い物が全品売り切れ、更に行つたところにあるコンビニは、カップ麺以外は全滅、つて訳で……つて、萩野ツ？ 大丈夫かツ？」

五月蠅いな、てか、どんだけついてないんだよ、コンビニが売り切れって、聞いた事ないぞ。

「わるい、俺が遅いばかりに、今、カップにお湯淹れるからな、すぐ出来る、たつた三分だ、三分待つてるよお～ツ？」

叫びながら、走り去る浅川の田はマジだった。

ま、いつか。

「あいつが戻つてくるまでの間に全部喰つまおつせ」

本当は味わつて食べたいところだが、この味を浅川に味合わせるのは勿体ない、あいつは百八十円のカップ麺を喰つてればいいんだ。ハグハグと、がつついでいると、林童も、状況を察したのか自分の分を大急ぎで食べ始める。

みそ汁もきっとあいつに食わせるには勿体ない味なんだろうな。食べ終えたチャーハンの皿を遠くに置き、目標を目の前のみそ汁に向ける。

この間、一分三十秒、残り半分。
ずずず、とみそ汁を一気にかき込む、みそ汁も最高の味だったが、それに歓喜している余裕は無い。

「鍋」と貰うぜッ？」

火にかかっている鍋を持ち上げると、一気にかき込む。丁度三分…。

「三分たつたぞ、今日のカツブ麺は最高の味だと思つぞつて、萩野どうした？返事をしろッ？萩野ツ？萩野オオオオオオツ？？」

火にかかった鍋なんて、丸飲みするんじや無かつた。

と、喉を抑えて悶絶しながら、意識が遠のいて行く俺は後悔していく。

序章 5

熱湯を注ぎ二分経ったカップ麺を両手に持った浅川が、慌てて戻つて来る。

「荻野ッ？ 大丈夫か、おい、返事をしろ」

喉が焼ける。やばい、だれか水を…、冷たい物を…はやく。

「毒を食らわば目までつてか、本当に鍋」と食いつやつなんか初めてみたよ……、つて、感心してゐる場合じや無いな、取り合えず、これを喰つて毒を抜くんだッ？」

いや、気持ちはありがたいが、今、その熱湯の入つたカップ麺を食うのは非常に芳しく無い状況なんだ。おい、よせ口を開くな、なんだその目は、眼が怖いぞ、やめろ……やめてくれえッ？

俺の口に入つて来た熱々熱湯スープは、喋る事すらままならない俺の喉をこれでもかという位に焼いて胃へと落ちて行つた。
限界だ。

「どうだ？ ちよつとは良くなつたか？」

「……。」

無言で睨んで見る。

「おーい、荻野？」

お前も同じ田に呑ませてやるぞ。

「…林童、こいつを抑えつけろ」

言つとの同時に、林童は、浅川を捕めた。

「さ、こつからが本番……、こつからが公開処刑だ」「ヒヤッ？」

小さく悲鳴をあげる浅川の目は、マジで怯えていた。口をじにじ開けると口の中があらわになる。

片手に持つたカップ麺をちらりと見ると、にんまりと口がほころび。さてつと。

一気に、カップ麺を注いでやる。声にならない声をあげて苦しむ浅川は、目から涙を流している。

お前が先にやつた事だからな、恨むなよ。

カップの中身が空になる頃には、浅川はその場につづくまつていた。

「よし、もう風呂も準備出来ただろうし、林童、先に入つてこいよ」「いいんですか？」

「ああ、お前と今のこいつを一人つきりにする、何をするかわからぬからな」

そう言って、その場にのびている浅川を指差して言つと、林童は領き浴槽へと向かつて行つた。

ノックアウトされた浅川が、部屋で寝ている。

「まつたく。おい、そのまま寝ちまつて、起きるシー。」

ぐつたりとしている浅川は、手をだらりと上げて、フラフワとふつて見せる。

浴室からシャワーの音が聞こえる。

どうやら、林童が風呂に入つたみたいだな。

「おおお、荻野、あいつ、風呂入つてるのかッ！？」

なんだよ、そんなに慌てて。

「やつだよ、なんか問題あるのか？」

「大ツツツツツツツツ問題だッ？ 仮に未成熟と言えど、女だぞ、それを自宅の風呂に入れるなんて。うおーっ？ 興奮してキタアッ？」

鼻息を荒げ、部屋を汽車歩きで歩き回るこのバカは、まだ残っていたカップ麺の汁を撒き散らし、その場に倒れこんだ。

「服汚れた、風呂入つて来る」

……ちよつとまで。

「どこの行く気だどこのへッ！？」

「風呂だよ……」

浴室へと歩いて行つた。

「勝手にしろ……」

数分後、鼓膜が破れそうな甲高い悲鳴の後に、凄まじい悲鳴が聞こえ、それと同時に、部屋の破壊される音を聞いた。

轟音とは、この事を言つのだらうなと、一人感心してみた。

窓の外には裸で宙を舞う浅川が、涙を流しながらこっちを眺めていた。

数分後、ずたボロになつた浅川は俺の前でむすつとテレビを見ていた。

「自業自得だ」と、ツツコムを入れてみたが、当人えらく機嫌斜めの様相で、軽く無視を決め込んでくれた。

まったく。

溜息をついて、無言の間をどうにか詰めよつと考えていると、林童が現れた。

浅川の顔が一瞬引きつったような気がしたが、次の瞬間には、また

ぶすっとした、不機嫌面になつていたので、確認のしようがない。

「上がりましたあ。えーと……荻野さん？ 入ってください」よ

家主は僕だぞおー、とかまたツツコムかと思つた浅川は、無関心を装つて、テレビを眺めている。

こっちを意識し過ぎて、明らかに視線がおかしな方を向いてる事は言つまでもない。

「ああ、わかつた……」

とだけ言つて、俺は浴室に向かう。

明日は、どうするかな。

林童が、俺の予想どおりに家出少女だったとして、学校にも行つてなかつたとしたら、明日は一緒に行動する事になるかも知れないな……。

浅川は、明日は仕事があるのでうか、あつたとしたら、長居はマズイだろうな。

なんて事を考えながら、てばやく風田をすませる。

戻ると、林童はもう寝入つているようで、浅川は未だにぶすつとテレビを眺めていた。
いや、見入つていた。

多分隣で林童が寝ている事にも気づいていないんだろう。

「浅川、風呂空いたぞ」

「ああ」

一言だけ返してまたテレビに見入る。

俺は、コタツに入ると、そのまま目を閉じる。

今日は色々あつたなど、思い出しているうちに、深い眠りについた。

朝、陽気な小鳥のさえずりで日が覚める。

どうして、田覚まし時計や、親に起こされたりしたら、あんなに田覚めが悪いのに、自然と起きた時つてどうしてこう田覚めが良いのだろうか。

なんて、頭を搔きながら考えていると。

急いで様相の浅川がドタバタと現れた。

「なんだってんだ、朝から騒々しい。こっちは休日だぞ？」

「居候にそんな事言われる筋合いね～よ。てか、お前と林童は万年休日だろうが！」

着替えを済ませ、昨日ついでに買つて来たであらひパンベニのパンを片手に律儀にもツツツゴミを入れてくれる。

こいつは、どうかのお笑いの養成所にでも行つた方がいいんじゃないかと思つ。

「お弁当、一応作つておきましたよ」

ペタペタと台所から林童が現れた。

「おっ、サンキュー……つて、食える物だろ？」「

「それはもう、あたし、料理だけは自信があるんですよ」

一応、弁当の匂いだけ嗅いで、カバンに詰め込むと、気持ちはうれしかったと言うような表情で、外へと走り出した。

外からは、「鍵はそこに置いてあるからなあ～」と言つ声が響いて

来た。

ちらと見ると、テーブルの上に、ひらがなで”すぺあきい”と書かれた鍵が置いてあった。一応、鍵は置いて行ってくれたようだ。

取り合えず、鍵をポケットの中に突っ込むと、朝飯を探りに台所に向かった。

台所には、すでに朝飯の準備が整っている。

「おはよー」

「おはよー」

林童は、椅子に座りすでに食事中だ。
はてさて、今日まだつあるかな。

取り合えず俺は、田の前にある激ウマチャーハンを頬張りながら考える。

このままずっと、浅川の家に上がり込んでる訳にはいかない。
行く艶なんてない。でもこれまでだって一人で何日かは過ごしてこ
れただ。

「まあ、なんとかなるかな」

「何がですか？」

「いや、何でもない、それよりお前は今日まだつあるんだ?」

「今日も街を歩きますよ」

そつか、ここつもこいつで何かしらの理由と田標があるんだわ。俺は、ポケットの中にある鍵を机の上におく。

「これ持つとけよ、なんかあつたらいつでもここに来れるよつよさ
「でも、それだと荻野さんが困りますよ、あたしはいいですよ。こ
れまでだつて、なんとかなつてたんですよ」

それは、俺も同じだ。

「まあ、いいわ。取り合えず、俺はもう行くから、鍵掛けて置いて
くれな

そう言つと、俺は街へ出て行く。

林童は、ぼうっと俺を眺めているだけだった。

暇だ。

洒落にならん、取り合えず俺は、いつも通りに街路樹の脇のベンチ
に横になる。

てか、何やつてんだろ? な、退屈な日常が嫌で飛び出したはずが、
今の現状は前以上に退屈だ。

浅川と二人で大笑いして、周りのみんなも巻き込んで馬鹿騒ぎして
……。そんな夢を見ていた。

遠くから聞こえて来る声で目が覚める。
太陽はもう傾いている。
結構寝てしまつたようだ。

声の元を探つて、視線をばらまこて見たが、そこいらにそれらしい影は見当たらない。

まあ、気になるし行つて見る価値はあるかな。
びつやら声は裏路地の方からじー。

入つて見ると、かなり薄暗くきみが悪い、あんまり長居のしたくな
い場所だ、変なに絡まれてもしたら事だしな。

「だから知らねえってんだよッ？」

「大体よお、そんなとこがあんなひ、俺等こんなとこに居ないって
の」

男の声だ、その後に、違ひねえと数人の笑い声が続く。

遠くてよく見えないが、絡まれてるのは女のようだ。
絡まれてるのかどうかはさて置いて、取り合えず言つて見るか。

「何かあつたのか？」

さり気なく輪に入ろうとしたが、やつぱり無理があつたようだ、男
の視線がこちらを睨みつけた。

「なんだお前？」

「いやいや、ちょっと声が聞こえてて、なんか興味のそそられるよ
うな話だったもんで」

手をフラフラと振りながら話を合わせる。

「ああー。おー、こいつに聞いてみる

男がそう言つと、女は俺の方を向くといつゝ言つた。

「貴方はヘブンを知つていますか？」

見ると、女は林童だつた。

ヘブン？ そんなもん知るかよ。

場に暫くの沈黙が流た。

序章 6（後書き）

この部で、序章は終了です。

次は、第一章に移ります。
サブタイトルは「ヘブン」

第一章 ヘブン

「それで、ヘブンって？」
さつきの男共が呆然としているスキに、ヒツヒツとこつものベンチに戻ると、林童を前に問いかけた。

言いにくそうに、もじもじしながら、林童は言つ。

「噂で聞いたんです。行き場の無い人たちが集まる楽園の噂ですよ」
聞いた事があるような気がする。ビリヨウもない連中の溜まり場の噂だ。

もつとも、ただの噂として、まったく気にして居なかつたが……。
そうか、ヘブンを探すつてのも一理あるな。

「特に氣にも止めなかつたが、ヘブンか……、確かに面白いだな

それを聞いた瞬間に、林童の表情がぱあーと明るくなる。

「でも、ヘブンの情報はこれっぽっちも入つて来ないし、もう諦めかなあつて……」

「……、そりが、頑張つて調べたお前が言つんだから、確かになんだうつな

「もう遅いし、浅川には悪いが、今日も泊めてもらおう

林童は、コクッと頷くと、後をついて来る。

ヘブンか……。本当に見つけたら面白いだろつな。

ドスツ

何かがぶつかった。

それは、軽くぶつかつた衝撃で倒れた。

「すみません!」

「…………。」

田の前には無言の少女が座り込んでいる。彼女はまったく反応を示してはくれないが、こちらの存在に気づいてないとか、そういうつの言つとは違うよつだ。

「…………なに?」

なに? ジゃないだろ? ぶつかつたから謝る、それすなわち自然の節理。

「いや、悪かつた、前をしつかり見てなかつた」

「……。怪我は。ない」

「さうか、でも悪かつた。その制服だとこいつとおんなじ学校か

「……、そう?」

いや聞かれても…、まいつか。

ここにいても仕方がない。

俺は、もう一度贖罪の意を込めて、片手を上げるとその場を後じた。

彼女の名札には、青川柚と書いてあった。

「何だつたんだ…、知つてるやつか?」

「知らないよ。多分、年下だねえ」

まあ、気のしても仕方がないか。

「へブン……、か。

「どれくらい調べたんだ?」

「へブンの事?」

「それ以外になんかあるか?」

「……無いねえ。……、調べ始めたのが、先月の頭からだから、丸々一月以上は調べて回ってるよ」

「収穫は?」

「ゼロ、誰も知らなかつた」

「一月で……。聞いた人数は三桁を軽く超えるだらつ。本当にあるのだろうか……。」

急に胡散臭さが増した。

「本当にあるのかねえ」

あるのかどうか怪しいへブン。それをこいつは、大真面目に探している。

こいつには、目標があるんだな。

気が付くと、俺は林童の頭を撫でていた。

「この手は何?」

「気にするな……、おまじないだ」

もし、本当にへブンなんてもんが実際にあつたなら、俺でも見つけられるのだろうか、夢つてやつを。

その後、帰宅するまでの時間を費つて聞き込んで見たが、まったく
収穫はなかつた。

そして、今日も浅川の家で夜を明した。

第一章 ヘブン 2

「ヘブン……か……。

「浅川、起きてるか?」

電気は消えてるが、たぶん起きているだろ?。

「ヘブンって知ってるか?」

「……、なんだよ……。明日も仕事なんだからね……、もう寝るよ

そつ言つてもさうと、寝返りをうつと、あつとこいつ間に寝息をたて始めた。

今日は、これ以上の情報を集める事は出来そうにない。

「せめて話くらいい聞いてくれてもいいものを」

なんて呟いても、浅川はスヤスヤと寝入っている。

今ある情報は、ヘブンと云う、若い世代の人間にとつての、楽園のような場所、組織があるって事くらいで、詳しい事はまだ何にもわからぬ。

たつた、それだけの情報だ、都市伝説のようなものなのかもしれない。でも、それでも俺は、ヘブン信じてみようと思つ。

樂園と言つくらいだから、きっとものすごい物があるに違いない。そつ考えただけでも、高鳴る胸の鼓動が、更に激しくせわしなくなる。

モンモンと、ヘブンへの妄想が絶好調に達したあたりで、一筋の光が部屋に舞い込んだ。

「朝日ツ？……、だとツ？」

時計に目をやると、6時をとつに廻っていた。

「あれえ、今田は早いんだねえ。朝御飯食べる？」

いや、俺にとつては夜食的な気分なんだが。つて、違う違う、これはまずい、一大事だ、今日はヘブンについての本格的な聞き込みをしようと思つていたのに。

「何時だ？」

「はい？」

「何時に出かけるよつにするんだ？」

「いやー、まあ、お昼までには出かけたいとは思つけど……。

それで、朝御飯は？」

昼か…、現刻0630時頃、起床予定時刻1100時に設定。

最大睡眠時間、三時間三十分。睡眠後の推定体力、及び脳の疲労度。身体、推定68%まで回復可能。脳、推定46%まで回復可能。今考える最大睡眠時間での、推定活動時間、およそ5時間。

何を考へてるんだ、俺は。

まあいい。とりあえず寝よつ。

無言のまま床に就こうとすると、突然に後方からの攻撃を受けた。被弾位置は、肩胛骨……。だから、俺は何を考へてるんだろうか。多分、疲れで脳がしつかりと働いていないんだろう。

ボヤける視界には、何やら文句を垂れている林童の姿が写っていた。

悪いな林童。

もう限界だ。寝かせてもらひよ。朝飯はまた今度いただくな。

「……、起きるー、昼だよー」

……、眠い。

もがきっと、もう一度布団をかぶり直し、睡眠に入る。

どれ程の時間がたつたんだろうか。

外を見てみると、辺りは紅に染まっていた。

「時間は……」

時計は、三時を廻った辺りを指している。

やつちまつたな。

周りを見渡したが、林童の姿が見えない。

「先に行つたのか……？」

行つてしまつたとしても不思議は無い、予定は昼前だつたんだからな。

探すか？……いや、俺は俺で聞き込むぞ。

テーブルの上に置いてある冷めたチャーハンを見つけ、それを一気に頬張ると、勢い良くドアを開いて、外へと駆け出した。

第一章 ベブン3

と、勢い良く外へ出たのは良いが、誰に聞けばいいのかまったくわからないのだが。

あの赤毛か？ あの銀髪か？ それとも、あの緑髪か？？
……、だれに声をかけたものか。

キヨロキヨロと辺りを見渡すが、それらしい人は多くいるのだが、声をかけるタイミングとか、全く掴めないんだが。

どひじしたものかな。

溜息について、ぼうつとしてみる。

人が右から左、左から右へと、忙しなくまるで、流れがあつて、その流れに乗つて生きているかのように闊歩している。
その流れに乗つていなければ、俺一人…、いや、もう一人いた。

目の前には、下を向きトボトボと歩く少女がこちらへ向かつて来ている。

その様子は、他の流れとは歪で、何処となく浮いてい見えた。

あれは、昨日の……。

「よひ」

一応、一度だけだとしても、顔を合わせた奴がいてよかつた。まずは、一人だな。

俺は、見つけると同時に声をかけてみる。

しかし、彼女はまるで聞いていないかのよつて、無視を決め込んでくれる。

「デジャブだ。

ああ、林童の時と同じか。

つて事は、やっぱり、奴も何かあるのかもだな。

とりあえず、手をつかんでやる事にした。

「ツ？」

「おわツ？」

手を掴んだ瞬間に鼻先を鋭い何かが通り。ほぼ同時に、激しい衝撃が右後頭部を襲つた。

一瞬視界がぼやけたが、なんとか踏み止まる。いや、ギリギリ踏みどどまれる程度に抑えてくれたんだろう。確実に急所を捉えたのに、若干外したんだ。当てようと思えば、テンブルをうち抜けたはずだ。

「なに？」

ポソリと、彼女はそつと口を開いた。

素つ氣無い返答だ。

いや、まあ素つ氣無いと言つても、素手にぶつ倒されているのだが。

「ちょっと、尋ねて見ただけだ。なんだ、その、ちょっと聞きた
い事がさ」

「だから、なに?」

無機質な瞳が俺を覗く。

「……、へブンって聞いた事ない?」

「……、へブン?」

彼女は、首を傾げて見せた。

それから、何かを思い出すように、じーっと一点を見つめ、それから、何かを思い出したようで、ハツとあたりを見渡す。

「組織の事?」

「組織?」

そう呼ばれているのか?

「そう。組織。少なくとも私たちはそう呼んでる

「私たち? 他にも誰かいるのか?」

「ええ。大切な仲間が」

そう、指差す先には、赤毛や青髪など、独特な髪色を華やかに晒している男が数人立っていた。

「あんたらも、へブン……、いや、組織を探してこらるのが?」

につしつしと、薄気味の悪い笑顔を浮かべる男共。多分それは、肯定を意味しているんだろう。

「あんたらも、訳有りなんだな」

「まあ、色々とね」

「俺も、いや、俺たちもそんな感じじで」

「たち？」

「ああ、もう一人いるんだ。昨日、一緒にいたる？」

「ああ、あの」

「ところでさ、あんたらは、その……、組織、の事をどいまで知っているんだ？」

少女は俯く。

男共は、苦笑いを浮かべ、バツの悪そうに下を向く。

それだけで、充分だつた。

「そつちも何にもなし……か

「まあ、焦つても仕方ないぞ。とにかく疲れているよつて見えた。

「まあ、焦つても仕方ないぞ。とにかく、あんたら、寝床はどうしてるんだ？」

「ああ、俺たちは、アジトを使つているんだ」

「アジト？」

「ああ、わりいな、アジトの事は内緒なんだわ」

少女は、男共の中にひそみ、代わりに赤毛の男が話す。てか、こいつめつさ阿呆そなんだが、大丈夫なのか？ 浅川とどっちが上か比べてやりたいな。

なんて、頭の中でバカ頂上戦を繰り広げていると、少女が、男の間を割つて出でてくる。

「いー。 許す。

仲間は多い方がいい」

「さつすが、ゆずつちだッ？ 大海のような心の広さッ。 グッと
くねぜりッ？」

「口スツと言つて生々しい音を立て、男はその場に倒れこんだ。

全く見えない拳が、頭部の急所を捉えたりし。

俺もあの拳を食らつていたようだ。

おお、怖い。

「五月蠅い、黙れ」

言い捨てるど、彼女は手を差し出した。

「わたしは、青川コズ。 ようじく」

「ああ、またなんかあつたら頼らせてもらひつか。 それで、アジト
つて？」

「ええ、街のショッピングモール建設予定地つて知つてるっ。 あそ
こ」

街のショッピングモール予定地つて言えば、ここ数年、鉄骨だけ組
んでそのまま放置されているあそこの事か。

「そこを寝ぐらに?」

「ええ、風通しが良すぎるのと、雨が振り込む事を除けば、快適そ
のもの」

それって、居住性にかけるんじゃ無いのか、なんて思つても口には
出さないが。

そうやって過ぐしてゐる奴らもいるんだなと、少し世界が広がつた気

が
し
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5779m/>

夢の楽園 S S

2010年10月10日22時35分発行